

# 科学が拓いた究極の社会教育

「自治」と「教育」と「衛生」は、新平の生涯を貫く信念です。その3本柱の一つである「教育」を考えた時、無線放送の登場は、極めて画期的な技術でした。人材育成に情熱を注いできた新平が、「無線放送」に限りない夢を託す。

## 1 人材育成に力を注いできた新平が「無線放送」と出会う

新平は、病院長時代から行政官・政治家時代を通して、研修会組織や研修施設の設立に努め、人材育成に力を入れてきました。夏期通俗大学創設や東京市長時代の社会教育課の分離独立もその一環です。晩年は少年団の育成に最後の力を振り絞りました。

学校教育や現職教育の充実、更には社会教育の充実に力を注いできた新平が、「無線放送」と出会った時、新平の側近であった永田秀次郎に、「一か所で作る講演でも音楽でも、無線で、全国の人々が一度に、いながらこれを聴くことができる。その施設を一刻も早く実現させたいから、君も尽力してくれ」と語りました。



【夏期通俗大学】

無線放送の事を知らない永田は、「夢のようなことを言っておられると思っていたのであったが、間もなく新平が総裁になって放送局が誕生したので、さすがは後藤さんだと心から敬服した。」と語っています。

【令和6年度第2回企画展】  
科学が拓いた  
究極の社会教育  
東京放送局  
初代総裁就任百年  
【併催】シリーズ後藤新平人脈考⑭ 下村宏

【期間】令和6年7月19日(金)～10月27日(日)  
奥州市立後藤新平記念館

## 2 東京放送局初代総裁就任

1924(大正13)年10月16日。社団法人東京放送局が設立され、満場一致で新平が総裁に推戴されました。歴代通相中、最も科学愛好者であったため、一般にすこぶる好評でした。世は、声望識見一世に高く、しかも新し物好きの新総裁を迎え、真のはまり役だと喝采しました。

1925(大正14)年3月22日。放送塔を芝浦の電気試験所跡の電柱を利用し、放送所は東京高等工芸学校の一部を充て仮放送を実施しました。諧謔好きの新平が「これこそ本当の借り放送だね」と洒落飛ばしたのはこの時です。

1925(大正14)年7月12日。新築の愛宕山東京放送局で本放送を実施しました。前日宮内省係官から御下賜金一封が下賜され、新平は感激に堪えず、放送室に飾って式を挙げました。



【仮放送での挨拶】

## 3 ラジオ放送の普及

(1) ラジオ版創刊を祝して「よみうり ラジオ版」後藤新平寄稿<1925(大正14)年11月15日>

「ラジオというものができてから、我らの生活に大きな変化が起こった。それはラジオが極めて低廉な値段で、極めて潤沢な知識を我々に供給してくれるようになったからだ。公民教育・成人教育を実際的に最も効果多く普及させるものが、即ちこのラジオの威力である。しかも其等の教化苦痛なしに甚大なる興味をもって授けるのであるから、その文化に及ぼす影響は新聞雑誌の使命と全く規を一にしている。従って、新聞紙が今日ラジオ版を創設することは頗る当然の事だ。」

(2) 細木原青起：漫画家『週間朝日』<1925(大正14)年7月26日><第5号より>

まだラジオを聞いたことのない男。ある店頭から漏れる拡声器の声を聴く。『ハハハ、レコードが大分痛んでるナ』4～5軒通り過ぎる。『此处でも同じ事をやってるナ、矢張りレコードが満足でない、それとも機械が損じているカナ』又4～5軒通過。『是は驚いた、此处でも同じ曲をやっている、長唄らしいが東京では今この人ののが流行るとみゆる。こいつはレコード一枚奮発せねばなるまい』・・・聴きおわって、『あれは誰のレコードですか』『あれはレコードではありません。ラジオですよ』『ウムこれがこの頃流行するラジオですか、聴取料を月に2圓も取られる。馬鹿馬鹿しい、俺達には寄席あたり4～5度覗いた方が面白い』



【細木原青起：漫画より】